

2014.02.26 熊本日日新聞

科学する人

次世代有機ELを開発した安達千波矢さん②

物理から有機材料へ転身

有機EL開発に取り組む安達千波矢さんは高校時代「数学は美しい」と物理に魅せられ中央大物理学科に進んだ。だが大学3年の時に外部の研究者の講義を聴き、有機物に出合う。

難しそうだが、やりがいはあるそうだ。「これだ」と決め、九州大大学院の有機材料研究室に進学。蛍光材料を使う有機ELを研究した。

博士号取得後、リコーで勤務。1991年、40度の高熱を押して米国の会議に参加し、フォレストという研究者と出会った。誘われて訪れた大学は日本とは違い、充実した設備があった。衝撃を受け、「いつか米国で研究したい」と願った。

99年、念願がかなう。フォレスト氏は、当時プリンストン大の教授。3年間、教授の下で研究した。

想像を絶する厳しさだった。1週間徹夜で取ったデータでも、すんなりとは通らない。けんかのよつな議論の繰り返し。論文の草稿を渡すと翌日、追加データを要求する赤ペンのチェックが大量に付いて戻ってきた。「そういう状態でも樂しむ人しか残れないかった」

フォレスト氏らはそのころ、発光効率が高い第2世代の有機ELを開発した。安達さんも関わったが、ベンチャーオークを立ち上げて実用化させる過程を目の当たりにし、米国の底力を感じた。



大学院時代の安達千波矢さん
(右端)=1988年(九州大提供)